

2015年度FDワークショップ開催報告

「授業デザインとアクティブラーニング」 (2015年5月26日@池袋キャンパス)

今年度当センターでは、2016年度から開始される立教ファーストタームプログラムを視野に入れ、教職員の皆様に、授業デザインを学び、「アクティブラーニング」とは何かを把握していただき、より豊かな教育実践をデザインするためのヒントになるよう、ワークショップ(1部・2部)を企画しました。主に新任教員を対象に、授業デザインの基礎、及びアクティブラーニング(以下、AL)のねらい・位置づけ・期待される効果とその手法について実践形式で学ぶものです。



講義の様子(山本)

当日は合計32名の教職員の皆様(若手層1/3、中堅・ベテラン層2/3)にご参加いただき満席となりました。

1部では「大学の授業とは何か?」「シラバスとは何か?」を考え、授業の目的と到達目標の書き方を確認した上で、ALの手法を実践しました。

具体的には、最初にアイスブレイクとして「握手法」を行い、参加者は同じグループ(1gr.4名)内のメンバーと互いに自己紹介をしました。次に大学の授業とはどのようなものかをペア、グループで検討し、クラス全体で大学の授業の目的について確認した上で、到達目標の書き方のポイントを整理しました。さらにグルー

プワークを行った後、全グループが発表を行い、クラス全体で意見を共有しました。1部の最後にALの評価の工夫の説明と当センターで開発した「論証型レポート・ルーブリック」を紹介しました。2部では学習科学の分野で近年注目されている「ジグソー法」を取り上げ、グループで学びました。

1部・2部ともに出席の皆様常に積極的に主体的にご参加いただき、ベテランから若手に本学の建学の精神、教育理念や歴史を伝える輪が自然と広がり、大変活発なグループワークとプレゼンテーションの場が生まれました。本ワークショップが盛会のうちに終了しましたこと、ご参加いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。



グループワーク

なお、本ワークショップの詳細は、11月中旬に刊行予定の「大学教育開発研究シリーズNo. 24」をご覧ください。

学術調査員 山本 裕子



全体の様子

予告

本ワークショップはご好評につき、秋学期に再度開催します(内容は春学期と同じ)。申込方法等の詳細は改めて学内一斉メール等でお知らせいたします。

日時:10月28日(水)12:20~14:50

場所:池袋キャンパス太刀川記念館3階多目的ホール

対象:本学専任教職員・兼任講師 ※事前申込制

BLPと授業デザイン

経営学部 教授 BLP主査 日向野 幹也



BLPの概要

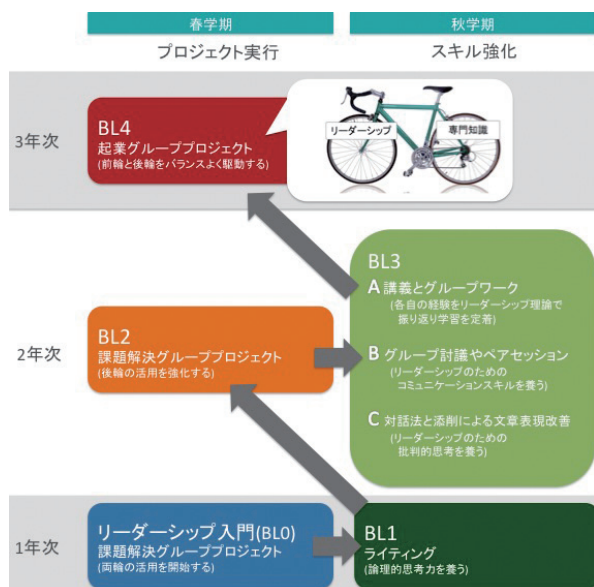
BLPは1年次から2年半にわたって行われる、7科目で構成される積み上げ式プログラムで、BL0/2/4はグループワークを行い、企業から出される課題を解き、提案する授業。BL0は経営学部1年生全員が履修する科目で、1クラス20名程度の少人数制（全18クラス370人規模）で行われる。教材・スライドは全クラス共通で、それに各教員・チューテントアシスタント（以下、SA）がオリジナルスライドを加えることも多い。提案はコンテストの形で、全クラス合同でタッカーホールで行われる本選を目指して、成果を競う。コンテストのあと、2週にわたってリーダーシップについて綿密な振り返りを行う。

◆BLPの教育目標

「権限がなくても、ビジョンを示して周囲を巻き込むリーダーシップの涵養」。

◆BLPのカリキュラム構成とその意図

リーダーシップを育成する「プロジェクト実行」科目と専門知識を習得する「スキル強化」科目を交互に履修する。まず春学期にプロジェクト実行科目を履修し、そこで必要な知識やスキルの足りなさに学生自身が気づき必要性を感じた上で、秋学期にスキル強化の科目を学ぶという仕組みになっており、学生が実践的に深く学ぶことができるようにデザインしている。



BLPのカリキュラム

授業で大切にしていることと、BLPを支える仕組み

BLPでは学生が授業の中で教員から学ぶだけではなく、SAからも学び、学生同士でも学び合うピア・ラーニングが生じるように授業デザインを行い、グループワークを通して学生一人ひとりが主体となるアクティブラーニングが生じるようデザインしている。

◆教育目標の明確さと振り返りの重要性

授業で毎回教育目標を提示し、何のために学ぶのかを学生に常に意識させている。eポートフォリオ上に、全ての提出物・課題、教員・SA・他の学生からのフィードバックをストックし、学生は常に学びの振り返りを行うことができる。

◆SAの組織化

各クラスに1名、SAを配置している。SAは前年度の科目履修者で、授業内でのグループワーク時は各グループのモニタリングやグループ活動の支援を行うほか、授業の進行役を担うこともある。ピア・カウンセラーやコーチとしての役目を果たし、先輩として、受講生にとって良いロールモデルになっている。また、授業後に毎回行われる教員・SAミーティングで、授業改善のための意見を積極的に出し、教員とともに授業作りを支えている。



教員・SAミーティングの様子：率直な発言が飛び交い授業改善に繋がられる。

◆教えすぎないこと

授業ではグループワーク時など、教えすぎないように配慮している。具体的には、学生からの質問にすぐにヒントを与えず、学生が自ら気づき考えるように、学習を支援する質問をし、学生自身に答えさせるようにしている。

(取材：山本 裕子)

当センターの教学IR(Institutional Research)部会では、学生の学修状況を把握するための調査を実施し、集計分析結果を教育改革推進会議を通じて全学に報告しています。各部署の課題や問題意識に基づくデータ分析に役立てていただくため、回答データの提供も行っています。

今回は「3年次生 学修状況調査」(2013年10月実施)について、キャリアセンターが行った「学生のキャリア形成」に関する分析結果を簡単にご紹介します。

3年次10月時点での立教生のキャリア形成意識 —大学生のキャリア形成における正課教育と正課外活動の重要性—

キャリアセンター 学術調査員 高田 治樹

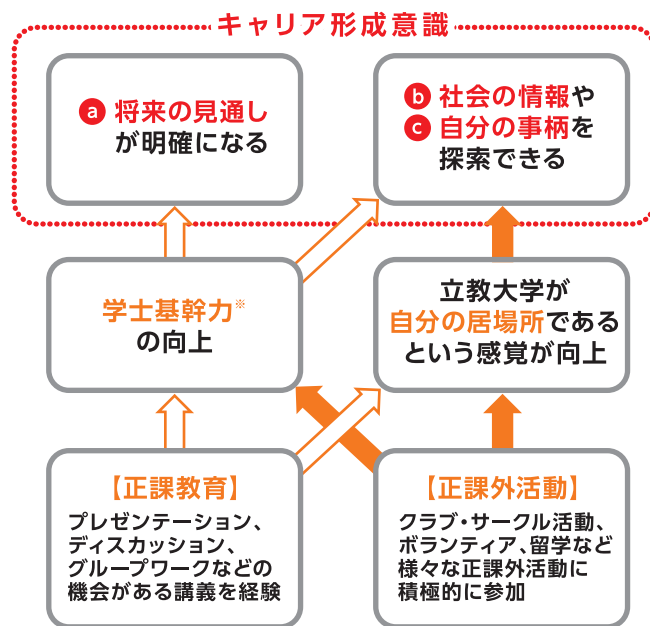
本学キャリアセンターでは、学生のキャリアを「社会的および職業的に自立した個人としての自分らしい人生のあり方」と捉え、学生を支援している。今般、「3年次生 学修状況調査」のデータを用いて、学生のキャリア形成に対する意識の現状を分析した。その結果、立教生のキャリア形成意識は、a)「将来の見通しが明確になる」こと、b)「社会の情報を探索できる」こと、c)「自分の事柄を探索できる」ことの3要素によって構成されることがわかった。また、調査時点(3年次10月)において、学生の将来に対する見通しはまだ明確ではなく、社会の情報を探索していない学生もいるものの、多くの学生は自分自身のキャリアについてよく考えていることも明らかになった。

さらに、このキャリア形成意識がどのように促進されるか、その過程について分析した結果、右図ようになった。第一にa)「将来の見通しが明確になる」は「学士基幹力」によって高められ、b)「社会の情報を探索できる」とc)「自分の事柄を探索できる」の2要素は「学士基幹力」と「立教大学が自分の居場所であるという感覚」によって高められていた。第二に「学士基幹力」と「立教大学が自分の居場所であるという感覚」は、正課教育の「プレゼンテーション、ディスカッション、グループワークなどの機会がある講義を経験」することや、「クラブ・サークル活動、ボランティア、留学など様々な正課外活動に積極的に参加」することによって向上することが明らかになった。

以上から、学生のキャリア形成意識を高めるには「学士基幹力」や「立教大学が自分の居場所であるという感覚」をいかに向上させるかが重要であり、そのために各学部で展開される正課教育(講義系科目と比較的少人数で行わ

れるゼミなどの演習系科目の組み合わせ)、及び様々な正課外活動に対し、学生自らが積極的に取り組んでいく姿勢を育むことが望ましいと考えられた。

本分析結果を踏まえ、キャリアセンターは、学生のキャリア形成意識の促進に向けて、プログラム(立教型インターンシップと各種準備講座等)の実施に留まらず、各学部の正課教育(キャリア関連科目)や各部署の正課外活動とさらに有機的に連携していく。



※「学士基幹力」は3年次10月時点での学修成果として、大学教育開発・支援センターが定義したものの。

キャリア形成意識の促進過程

本号はどの記事もアクティブラーニングに関わる内容となりました。当センターは、今後も先生方の日々の教育実践や各部署の教育改善の取組をご紹介します、本学の学生が自ら考え問題を同定し、他者と協力して課題を解く力を育成する授業デザインのためのヒントをお届けしていきます。(山本)

「MOVE 第16号」

立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニュースレター
2015年9月25日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel: 03-3985-4623 Fax: 03-3985-4615
E-mail: cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>